

月報

71号

発行所

青丘文庫

編集・発行★韓 哲 曦

〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1

メゾンド青丘ビル2階

TEL(078)734-5989 FAX 735-0660

迎

春

昨年八月から年末にかけて、ソ連共産党さらにソ連邦が崩壊し、堅固な過去が見てる前で瓦解し混沌とした未来が噴出してくるのを目撃し、さらに年末には南北合意書署名、韓国の核不在宣言がなされました。

新しい年が大きな期待と不安のなかで展開し始めています。この画期の年に、弱くはあっても何程かの力を尽くしたいものと切に望みます。御健勝を祈ってやみません。

一九九二年 元旦

韓
哲
曦

幸田タマについて

松田利彦

関東大震災以後から一九三〇年代後半頃までの時期、すなわち官製在日朝鮮人統制団体協和会が全国的に展開を見る以前の時期における、日本人民間人による「内鮮融和」事業の一例として、一九二〇年代初めから三〇年代後半期にかけ福岡県八幡市において、朝鮮人夜学校を運営した幸田タマを取り上げた。史料としては、幸田タマ「鮮人教化の道に精進するまで」『朝鮮地方行政』五巻五号(一九二六年五月)、福岡県社会福祉協議会編『福岡県社会福祉事業史』上(一九八二年)などに拠った。

さて、八幡市では、第一次大戦後、北九州工業地帯の労働力需要に応じ、在日朝鮮人は急増した。一九二〇年代末の数字では八幡市居住朝鮮人約二六〇〇人の四人に一人が八幡製鉄所関係の人夫となっている。幸田が事業に乗り出したのは、こうした在日朝鮮人社会の形成期に当たっていた。

幸田は一八九七年頃、佐賀県唐津市に生まれた。在日朝鮮人関係の事業に乗り出したきっかけは、本人によれば、幼いころ渡来人による文明伝播を知り、「報恩」の念に打たれたためという。この信憑性はともかく、かなり早い時期から朝鮮・朝鮮人に関心を寄せていたのは事実らしい。一九一七年頃八幡に移ってから「自分が教へて居る児童が鮮人をなぶったり、ひどい家主から善良な鮮人がいじめられてゐたりするのを実際に見ていたという。また、三・一運動以前のことと思われるが、「朝鮮の北部で同士の人と共に教化事業を初め度いから土地を貸して呉れ」と古賀拓殖局長に頼んだこともあった(これは実現しなかった)。

早くに夫を失っていた彼女は、一九二二年、同じく未亡人となっていた姉妹伊藤小千代、小林ヤソと揃って、朝鮮人教育事業の準備に取りかかった。(三人は八幡市前田小学校の教員)。対外的な折衝は、外向的な幸田が主に受け持ち、下田歌子、頭山満らと面談したほか、八幡警察署長と協議の上、寄宿する朝鮮人の人選をした。七月、「鮮人夜学校」を設立、禹政源(二九) 白樂性(三〇) 他、

製鉄所の労働者六名を收容した。この際、八幡製鉄所職工灌口より無料で家屋を借りていることから分かるように、この事業は製鉄所と深い関係をもっていた。

事業の目的は「東洋平和の爲め合併せられたる正義の國家的大理想を自覚せしめ其の懿徳良能を啓発し大日本國民たる徳器を成就せしむるを以て目的とす」とされ、算術、國語(日本語)、修身を、幸田、伊藤、小林の三人により無料教授した。二五年、市会決議による家屋無償貸与を受け移転、この頃は当局の積極的支援によって事業が伸長していった時期と言えた。当時期、日本人教師は六人、生徒数は四〇人ほどだった。以後、一九二六年、八幡製鉄所より、職工職夫官舎を貸与され、翌年には、製鉄所より、朝鮮人職工職夫の教化に関する事務を囑託された。さらに、恩賜財団慶福会の助成で、建物を増築、宮内省下賜金、内務省奨励金なども受けた。このような実績の下、八幡市有数の朝鮮人統制団体へと発展し、一九三四年には、八幡鮮人親睦会本部を併置した。

しかし一方で、幸田は一九三〇年代中頃から、朝鮮「満州」国境地帯の開墾のため、「鮮人ピオニール移民隊」を編成することを企図している。これが実行されたかどうか不明だが、三七年幸田の学院が八幡市の借受となり、八幡協和館と改称、県社会事業協会に転与されており、何らかの転換はあったものと思われる。

このような幸田タマの事業は、時期的にまさに協和会時代の前史をなすものであった(協和会八幡支会は一九三九年設立)。またその内容の点でも「一修身、二國語、三算術を必修科目として、歴史、地理、理科を随意科目とし……其他毎日曜日修徳会を開き、近隣の内地人と共に集ひ道德的知識の研究開発をなし、實際指導に努め徳性の涵養を図り、又各種の講演会に臨ませ復演会を開き、或は毎月朝鮮總督府より寄送の雑誌『朝鮮』によりて朝鮮事情を知らしめ、或いは教師と共に在舍鮮人一同興風会を起し、毎月例会に出席せしめて社会事情を窺はしむる等の施設がある」というように(猿野子之吉「鮮人の慈母幸田女史」『斯民』二〇巻一二号(一九三五年二月))、同化主義的な性格の強いものであった。そして、それゆえに八幡警察署からは高等課長、内鮮係、朝鮮人通訳の支援が途絶えることがなかったし、製鉄所からも一貫した支援を得ることができたのだった。

朝鮮民族運動史研究会 第一〇八回例会

金森 襄作

「一九三五、六年における間島地方の共産主義運動」

一九三二年秋、官憲の大弾圧を受け壊滅状況に陥った満州省委は本拠地を奉天からハルビンに移した以後三六年まで、中共本部はその再建のために人材を派遣するも成功せず、その上「馬」「土団子」「米牙」等のスパイ容疑で、具体的指令もさしひかえたことも相まって、省委と下部の各特委との関係は断絶状況となった。その結果、各下部の党组织や人民革命軍は孤立化し、単独で闘争を持続・展開していかざるをえなくなった。

この全般的状況下でそれまで満州で最も先進的、かつ激烈な闘争を展開してきた東滿特委も孤立化し、さらに日帝・満州官憲の継続的な大討伐を受け、平野部から山岳部に追われ、そこで赤色ソビエト地区を形成するも、これまた集中的攻撃を受け破壊され、人民革命軍は二分され、主力は南滿へ、一部は北滿隣接地帯に移転せざるをえなくなった。この過程で党は間島在住民衆から離れ、共産党组织も軍内組織化と変形化していくのであるがこの劣勢化の中で、一九三四年秋より「民生団事件」が発生し、多くの朝鮮人幹部が除去され、党・軍共に一層弱体化していった。その最中の年末、魏極民が「民生団事件解決」と東滿特委再建のため満州省委から派遣されてきたが、両者共なしえないまま、翌三五年五月、コミンテルに召還される。

その間、二軍と党は完全に二分され、遂に一軍と五軍地域まで追いやられ、各々一軍・五軍と合流せざるをえない状況となっていた。双方の地域で各々東滿特委再建の努力は試みられるも逮捕され失敗する。が、その直後の三六年二月、魏極民はコミンテルン決定即ち統一戦線樹立指令をもつて帰国し、東滿特委再建を図ろうとしていた。しかし「反民生団」闘争の終結は行ないえたものの間島地方での基盤を失った東滿特委の再建は当面望むべくもなく、ここに東滿特委を南滿省委に解消し、人民革命軍も第一軍、第二軍を合せ抗日連軍第一路軍に改変せざるおえなかった。

とはいえ、破壊された間島地方での運動の再興も企画していかなければならないが、それまでの運動の主力であった朝鮮人の離反は単に「反民生団」闘争の終結や幹部登用あるいは従来の抽象的な「郷村ソビエト樹立」「民族自決権」スローガンでは止めようがなく、ここに具体的な「民族自治」と「民族孤立」を提唱し再度大量の朝鮮人の参加を図ろうとしていた。その「民族孤立」のための組織が「在満韓人祖国光復会」で第六師金日成がその責任者となるがそれは第一路軍とは別個の独自の組織として、比較的孤立的に長白山や朝鮮国境地帯で祖国の独立運動を展開していくことになり、後日金日成が独創的活動を行ったといわれる運動期を迎えていくのである。

新図書案内

1992年1月発行

アジア・キリスト教の歴史	日本基督教団出版局	東京 同局 614P 1991
韓国 ^의 社会 ^와 宗教	崔 吉城	ソウル 亜細亜文化社
日本學入門－文化人類學的視角－	//	// 啓明大学出版部
韓国人 ^의 恨	//	// 도서출판 398P
『アリランの歌』覚書	李 恢成、水野 直樹	東京 岩波書店 518
駐韓日本公使館記録5	國史編纂委員会	ソウル 同会 500P
大韓民國史資料集6	//	// // 524P
// 7	//	// // 500P
對馬島宗家文書記録類目錄集	//	// // 511P
韓國史料叢書第33 東史約下	//	// // 836P
// 第34 朝鮮社會史資料1	//	// // 706P
中國正史 朝鮮傳 譯註 四	//	// // 568P
韓國獨立運動史 資料義兵篇XII 19	//	// // 683P
한민족 독립운동사7	//	// // 415P
// 8	//	// // 527P
駐韓日本公使館記録 12～17	//	// // 1990年
各司謄録 40～47	//	// // //
朝鮮王朝實録 分類集 思想篇2	//	// // //
// 歴史篇2	//	// // //

研究会御案内

- : 在日朝鮮人運動史研究会 第140回例会
 - 日 時 1992年1月12日〔日〕 午後2時
 - テーマ 体験談「解放までの私の歩み」
 - 報告者 朴 憲行氏
- : 朝鮮民族運動史研究会 第110回例会
 - 日 時 1992年1月19日〔日〕 午後2時
 - テーマ 日帝下の赤色農民運動
 - －最近の韓国での研究を通して
 - 報告者 飛田 雄一氏
- : 日・韓キリスト教関係史研究会 第20回例会
 - 日 時 1992年1月21日〔日〕 午後2時
 - テーマ 韓国キリスト教史ⅡのⅠの①と②
 - 報告者 梁 寿龍氏

場所はいずれも青丘文庫にて